

《宇宙！白色輝光》展

“松本千里的宇宙，從指尖向無限延伸。”

——沓名美和

松本千里初次接觸絞染技藝，是在進入廣島市立大學後不久。隨著對染織課題的深入研究，她逐漸被這一技法的簡練與深邃所吸引。通過捆紮布料，再施以染色，絞染展現出豐富的表現力。從那時起，她便將這一技法融入自己的創作。然而，初次觀賞她作品的人，或許不會立刻意識到它們是用絞染技術製成的。

在未經染色的純白布料上，無數的凸起密集排列。有時，它們彷彿從榻榻米的縫隙間爬出；有時，它們膨脹成龐然大物，主宰著整個空間，散髮出宛如巨大生命體般的震撼氣息。這並非偶然，松本所著迷的並非絞染技法中的“染色”過程，而是用線將布料紮起而形成的被稱為“絞粒”的細小塊狀布料。在由無數絞粒聚集所形成的有機動態之中，她感受到生命的氣息。

絞染的歷史在日本可追溯至6或7世紀，最早的實物案例保存於法隆寺與正倉院。而在全球範圍內，早在5000年前，印度及其周邊地區便已使用絞染裝飾衣物，後經絲綢之路傳入日本。此外，非洲、秘魯、中國及中亞等地也存在類似技法，絞染作為一種裝點人們生活的技藝在不同文化中不斷發展並傳承至今。有趣的是，儘管絞染廣受歡迎，但在歐洲的傳統紡織品中卻鮮有類似的技法。這些根植於當地的美麗形狀、圖案與色彩與西方的審美觀念相去甚遠，它們在漫長的歲月中形成。這一演變過程，彷彿陳年佳釀在木桶中靜靜醇化，最終呈現出該地區獨有的味道。

在日本有很多著名的絞染產地，包括京都、秋田、大分、新潟等地，而松本選擇學習的是愛知縣歷史悠久的“有松鳴海絞”。與許多日本傳統工藝一樣，有松鳴海絞採用分工制，由專業工匠分擔製作模板、繪制輪廓、布料捆紮和染色等各個工序。過去許多農家婦女將絞染作為家庭副業，雖然她們從小就掌握了這一謀生技能，非常熟練，但她們既非“人間國寶”，也非藝術家，她們經營家族生意、做家務、養育子女、與當地婦女建立社區，同時還要從事大量的體力勞動。

松本將每一個絞粒突起視作獨立的生命體，並將它們的集合描述為一個“群體”。從絞染的歷史來看，這種感知方式再自然不過，因為那些用線紮制而成的微小布料突起中，埋藏著數千年的記憶和無數國家和地區無名人士的生活印跡。

通過挖掘二維平面紡織品的絞染中的個體與群體之間的普遍關係，進而發展為活用空間的三維表達，松本的作品不僅延續了傳統，也是對新藝術表達形式的大膽挑戰。

再次凝視她的作品，我們會發現，“紮”這一極其原始的動作，源自人類的生活體驗。在極其艱苦和微小的手工過程的反復累積中，藝術家的能量通過指尖被悄悄注入。

通常日本絞染多採用絲綢，而松本刻意選擇了高彈性聚酯纖維及光澤感強烈的聚氨酯等合成纖維，使作品呈現出獨特豐滿的物理形態。

即使是技藝嫺熟的匠人，一天最多只能捆綁上幾百個絞粒。而松本的作品往往覆蓋整個展覽空間，並以包圍性的力量使觀者沈浸其中。她的作品不僅是視覺上的震撼，更是大量手工勞動積累的成果。

隨著她雙手的移動，思考形狀與表達的擴展，布片發生了形狀的改變，變得更加凹凸不平，緊貼在柱子和牆面上，並呼應整個空間不斷擴大。最終，光芒從內部誕生，蜿蜒扭動交織在一起，好似一個單細胞不斷分裂和繁殖尋找新形態的進化過程。

松本的所有作品，無論形狀或大小，皆源自最初的一個絞粒，這一點對於理解她的藝術本質至關重要。正如地球上最早的生命體約35億年前誕生，所有的生命都經歷著並代代相傳交織在一起的故事。

一旦意識到這一點，我們會發現，每一個絞粒猶如宇宙中構成星系的小小星辰。正如浩瀚宇宙中的某個角落誕生的星星一樣，松本掌心中的白色星星也在靜靜脈動著，使原本潔白的布料化作孕育新生命的載體。通過她的作品，我們得以發現，一塊源於日常生活的布料竟能與宇宙的基本能量深刻相連。

松本千里的藝術雖然源自日本傳統的絞染技法，但她所創造的每一個絞粒都是一個生命，你可以感受到人群中巨大能量的反復收縮和爆發。就好像它有自己的生命，承載著地球的記憶。

「宇宙は白く瞬く」展

「松本千里の宇宙は、指先から無限へと広がっていく」——沓名美和

松本千里が絞り染めと出会ったのは広島市立大学に入学してすぐの頃だという。染織に関する課題を紐解くうちに、布を糸で絞り染色する絞り染めのシンプルで奥深い技法や表現の豊かさに魅了されていったといいます。以来、彼女は絞り染めを自身の作品に取り入れてきましたが、初めてその作品を目にした者は、それが絞り染めの技法によるものだとは気づかないかもしれません。

染められることのない、真っ白なままの布に無数の凹凸が密集し、時には畳の隙間から這い出るように、時には巨大な突起物となって空間を支配していくその様相は、まるで一つの巨大な生命体のような迫力を備えています。それもそのはずで、松本が惹かれたのは、絞り染めの「染め」の部分ではなく、布を糸で括ることで生まれる「絞り粒」と呼ばれる小さな布の塊だったのですから。その形状、そして絞り粒が無数に集まることで生じる有機的なダイナミズムに、彼女は生命(いのち)の気配を感じ取っているのです。

絞り染めの起源を遡れば、日本では6~7世紀に始まり、最も古い例は法隆寺や正倉院に遺されています。一方、世界に目を向けると、インド周辺では約5000年前には絞り染めが衣服の装飾に用いられていたとされ、その技術がシルクロードを経て日本にもたらされたことが想像できます。さらに、アフリカ、ペルー、中国、中央アジアなど、世界各地に同様の技法が存在し、絞り染めが人々の生活を彩る技術として発展しながら、現在まで継承されてきたことがわかります。ユニークなことに、これほど広範囲に伝播していった絞り染めですが、ヨーロッパの伝統的なテキスタイルのなかではほとんど類似のものが見られません。西洋の美意識とは離れたところで、その土地に根差した美しい形や模様や色彩が、長い年月の中で形成されていったといえるでしょう。まるで樽の中で熟成された蒸留酒が、その土地独特の味わいをもつかのように。

日本国内にも、京都、秋田、大分、新潟など全国各地に絞り染めの産地がありますが、松本はそのなかでも特に歴史ある愛知の「有松鳴海絞り」を学びました。有松鳴海絞りは、日本の伝統工芸に多く見られるように分業制で作られ、型紙作り、下絵描き、布の絞り、染色といった工程ごとに専門の職人が作業を分担しています。かつては農家の女性たちが内職として絞りの作業を行うことも多かったのだそうです。幼いころから生活の糧に身に着けてきた彼女たちの技が高度に優れたものである一方で、彼女たちは人間国宝でもアーティストでもありません。家業をし、家事をし、子どもを育て、地域の女性たちとコミュニティを持ち、そうした暮らしの中で、途方もない手業を成しているのです。

松本千里は絞り粒のひとつひとつを命あるもののように語り、その集合体を「群衆」と表現しますが、絞り染めの歴史を振り返ればその感覚は至極当然のもので、まっさらな布を糸で括ることで誕生する、あの小さな布の粒には、数千年という遥かな時間と無数の国と地域の名もなき人々の暮らしの記憶が潜んでいるのですから。

平面的なテキスタイルとしての絞り染めのなかに個と群衆という普遍的な関係性を見出し、さらに空間を活かした三次元的な表現へと発展させることで、松本の作品は単なる伝統の継承にとどまらず、新たな芸術表現への果敢な挑戦ということができるといえるでしょう。

もう一度、彼女の作品をじっくりと眺めてみましょう。

人間の暮らしのなかで生まれた「絞る」という極めてプリミティブな行為。その気の遠くなるような小さな作業の積み重ねによって生まれる突起の一つひとつには、作り手のエネルギーが指先を通じて静かに満ちているようです。

通常、日本の絞り染めには絹が用いられますが、松本はあえて伸縮性の高いポリエステルや光沢のあるウレタンといった化学繊維を使用することで、肉体性を帯びた独特のむっちりとした、ふくよかな造形を生み出しています。

熟練の職人でも一日に括ることができる絞り粒は数百個といわれていることを考えれば、広い展示空間を覆い尽くし、観る者を包み込むような迫力を持つ松本の作品が、いかに膨大な手作業の集積であるかが理解できるでしょう。

手を動かしながら形や表現の広がりを思考する彼女によって、一枚の布は形を変え、凹凸を増やし、柱や壁面に纏わりつき、空間全体と呼应しながら広がっていきます。やがて内部に光を宿し、動きを与えられ、ねっとりとした姿は、一個の細胞が分裂と増殖を繰り返しながら新たな姿を模索していく進化の過程のように思われるのです。

形状も大きさも異なる松本の作品のそのすべてが、たった一つの絞りから始まっていることは彼女の芸術性を理解する重要なポイントといえるでしょう。それはまさに、地球ではじめての生命体が誕生したとされる約35億年前から、命ある全てのものが経験し、連綿と紡がれてきた物語そのものです。

そのことに気づくと、絞りの一つ一つは、まるで宇宙に銀河を形成する小さな星々のように感じられてくるのです。広大な宇宙のどこかで星が誕生するように、松本の掌の中で生まれた白い星たちが、静かに脈動し、真っ白な布は新たな生命を包み込むものへと変容していく。作品を通じて私たちは、日常のなかから生まれた一枚の布が、宇宙の根源的なエネルギーと深く結びついていることを発見するでしょう。

松本千里の作品は、日本の伝統的な絞りの技法から始まっていますが、彼女の生み出す絞りの一つ一つは生命であり、群衆の大きなエネルギーの収縮と破裂の繰り返しを感じます。まるでそれ自身が命を宿し、地球の記憶を宿しているかのように。